



TITLE:

京大広報 No. 652

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 652. 京大広報 2010, 652: 3063-3084

ISSUE DATE:

2010-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196432>

RIGHT:



京大広報

No. 652

2010.1



尾池和夫前総長肖像画贈呈式
—関連記事 本文3076ページ—

目次

京都大学を衍沃な土壌とするために 総長 松本 紘	3064
〈大学の動き〉	
京都大学 東京フォーラムを開催	3066
アセアン大学連合(AUN)と学術交流協定を タイ王国教育省高等教育局で締結	3066
新年名刺交換会を開催	3067
平成22年度入学者選抜学力試験 (個別学力検査等)の実施日程	3067
〈寸言〉	
百聞は一見にしかず 三宅 良明	3068
〈随想〉	
フィールドノートのデータベース化を 名誉教授 高谷 好一	3069
〈洛書〉	
21世紀COEプログラム奮闘記 森 直樹	3070
〈栄誉〉	
平成21年度医学教育等関係業務功労者の表彰	3071
〈話題〉	
第17回日本学術振興会拠点大学交流事業 「都市環境」日中合同会議を開催	3071
森林科学公開講座「森と、地球と、それから私」 を開催	3072

細胞エンジニアリングの2009年世界大会(iGEM) で京都大学学生チームが銀賞を受賞	3073
シンポジウム「第2回サービス・イノベーション 国際シンポジウム」を開催	3074
テクノ愛'09最終選考会を開催	3075
尾池和夫前総長肖像画贈呈式を挙行	3076
国立大学附置全国共同利用研究所・ 研究センター協議会第6回総会を開催	3076
シンポジウム「内部統制報告・監査の現状と課題」 を開催	3077
グローバル COE プログラム 「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」が ウィーン大学知識ビジネス工学科と連携	3078
京都風電気自動車(Kyoto-Car)の新作コンセプト カーを発表	3078
平成21年度能楽鑑賞会を開催	3079
AEARU(東アジア研究型大学協会)「15th Annual General Meeting」および「25th Board of Directors Meeting」を開催	3080
化学研究所「第109回研究発表会」を開催	3080
第13回京都大学国際シンポジウムを開催	3081
第3回京都大学オープンコースウェア 総長懇談会を開催	3082
マレーシア工科大学副学長が本学を訪問	3082
〈計報〉	3083

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学を衍沃な土壌とするために

総長 松本 紘

新年あけましておめでとうございます。

15ヶ月前の総長就任の挨拶でも述べましたように、大学を取り巻く環境の変化は激しく、それへの対応や10年後を見据えた大学の改革など多くの課題を京都大学は抱えています。新たな年を迎え、私の総長としての任期の6年、すなわち72ヶ月のうち、5分の1が既に経過しました。日本や世界ひいては人類の行く末はますます不透明感を増しているように見えますが、未来は待つものではなく、創りだしていくものであるとの信念のもと、京都大学のあるべき姿にむかって着実に必要な改革を進めていきたいと思います。

年頭にあたり、本年特に力を入れて取り組みたい様々な課題のうち、本稿では以下の2点について私の考えを率直に述べ、改革の実現に向け、京都大学の教職員、学生および関係者の皆様のご支援をお願いする次第です。

(1) 京都大学の国際化について

私自身、京都大学全体で国際化は遅れていると感じています。最近のことなのですが、学内標識が英語化されていないことを調べた学生が私のもとに報告に来てくれました。外国人が本学を訪問した際、このようにまだまだ不便を感じる状況にあるということは一例です。

国際化には様々な意味があります。それは今あげたような外国人のアクセスがいかどうかや外国からの訪問者や留学生が直面する日本語の壁等の障害に対して、大学全体でどの程度バリアフリー化が進んでいるかにとどまりません。さらに重要な国際化は、研究や教育が国際的なレベルで十分に競争的で、それが自己満足に終わっていないかを教職員が意識することであると考えています。研究においては世界の最先端を走っていると自他ともに認められる分野もあるとは思いますが、大学全体として世界的に



プレゼンスが高いと認められるためにはもう一段の努力が必要ではないでしょうか。

国際化になじまない教育研究分野があることも十分に承知していますが、国際発信という観点からみると、

国際化を無視するのはいきすぎと感じられます。日本がその分野において最高水準を誇るので、何も国際的に評価される必要はないという議論もあるのかもしれません。しかし、本学において日々の研鑽の結果として国際的に素晴らしい研究や教育が行われているかを虚心坦懐に問い続ける姿勢が重要であると思います。そのような姿勢を私が単純に見過ごしているのかもしれませんが、しかし、そうであれば、京都大学の国際的なプレゼンスがもっと高くてもおかしくないと思います。いいものはあるけれどもそれが国際的に知られていないのかもしれませんが、それは英語を始めとする多言語で発信していないことがその原因のひとつになっているのではないのでしょうか。確かに、本当にいいものが日本語で書かれていれば、いずれ翻訳されるということはあるでしょう。外国人がその価値を高く評価し、翻訳して、世界に紹介してくれるでしょう。しかし、もう少し積極的な態度もあり得ます。すべての分野で国際化対応に一律一様の行動をとっていただくつもりはありません。しかし、京都大学の世界でのプレゼンスを高めるいまひとつの努力を、それぞれの分野で進める姿勢を持ち続けていただきたいのです。残念ながら、いまのところ京都大学の素晴らしさは世界からは十分には見えていないのではないかと危惧しています。

大学全体として、京都大学の教育や研究を国際的に発信するしくみや行動計画が必要と考えます。その一環として、例えば、授業の一部を多言語で講義

するように、全部ではなく、一割くらいはという形でお願いすることになるかもしれません。京都大学が国際的なプレゼンスを高めていくためには、言葉の障害がなくなるような多言語講義の充実や、生活において留学生や外国人研究者が本学のキャンパスで安全で快適な教育研究生活をおくることができるよう施設の拡充をはかる必要があります。

日本にきた留学生は非常に高い下宿代、言葉のバリア、食事の問題に直面します。日常生活で生じる苦勞を少しでも軽減したい。その気持ちでこれまで問題に取り組んできましたが、その取り組みを一層加速化させたいと思っています。留学生や外国人研究者に素晴らしい教育研究環境を提供することは国際化の第一歩です。

(2) 京都大学の未来戦略について

総長就任以来、多くの人々とお会いする中で、京都大学に対して社会が寄せる大きな期待を日々感じています。しかし、その期待に我々は十分こたえているといえるのでしょうか。期待に甘えることなく、常にその存在意義を問い直す姿勢が求められます。京都大学の社会的使命とは何か、京都大学は入学を希望する学生、在学生、卒業生、教職員にとって魅力ある大学であるといえるのか、あるいは京都大学は我が国あるいは世界において魅力ある大学といえるのかについて、10年先を見据えた議論をいまやる必要があります。そこで、部局から推薦された教職員39名を総長室の特命補佐および室員に新たに任命し、総長室を拡充し、そのなかで(1)京都大学の国際化、(2)リベラルアーツ・教養教育、(3)大学入試制度の将来像、(4)キャンパスの将来像、(5)研究者・職員の人材育成、(6)外部戦略のそれぞれを調査・検討するワーキンググループを編成しました。ワーキンググループは、10年後の京都大学のあるべき姿を構想し、月2回程度のペースで担当項目について検討し、3月末までに中間報告、6月末までに最終報告をとりまとめ、私に直接提言いただくことになります。一例のみあげますが、全学に広範に影

響を与える教養教育について、それはどうあるべきか、いわゆる全人教育をどうするのか、あるいは教養教育を大学や大学院としていかに推進すべきか、学部初年次教育、専門教育、大学院教育における全人教育とは何か、そもそも教養とはいったい何かといったこと等について活発な議論を始めていただきたいと考えています。

(3) むすびに

本学の教員が授かる国際的な学術賞等が示すように、いくつかの研究分野において京都大学は国際的にそのプレゼンスを現しています。本年もさらに成果を重ねられんことを期待しています。そのために研究専念の障害となっているシステム的な問題として何があるのかを明らかにし、それを取り除くように大学全体で考え、改善を進めていきます。教育改革は難問です。それぞれの部局がたたえ入試に対する基本方針、学修課程に関する基本方針、学位授与に関する基本方針に沿って優れた人材を育成するために、教育の全課程をいままで以上に可視化するとともに、全学の学生が受講する教養教育について、それが全学に広く関係する問題であるからこそここで一緒に考えてみようと思います。あわせて、社会に開かれた形で国際寮、研究者寮、混住寮、将来の学生寮のあり方も考えて、具体的に進め得るものは実施にむけて直ちに行動を起こしたいと考えています。

昨年年初の挨拶において、我が国および人類の将来にとって、大学は知の淵源であり、衍沃な大地の如く、そのあるべき姿を保ち得る限り、永遠に枯れることなく人材と知恵を生み出し得る土壌のようなものであるとの「大学土壌論」を示したところですが、その土壌を一層豊かなものとするための改革を本年も着実に進めていく所存です。この改革には、京都大学の教職員、学生および関係者の皆様のご理解とご協力が何にもまして必要です。一層のご助力をお願いするとともに、皆様のご多幸をお祈りし、年初の挨拶とさせていただきます。

大学の動き

京都大学 東京フォーラムを開催

平成21年12月9日(水)、「京都大学 東京フォーラム」を東京會館で開催し、企業をはじめ、大学、学術団体、文部科学省等関係省庁など各方面から約120名の方々に参加いただいた。

「宇宙船地球号の未来を考える－京都からの発信－」をテーマとして、限りある資源の下で、資源・環境問題についての悲観論や楽観論を超えて、文理にまたがる本学の新進気鋭の研究者の報告を素材に、知識や技術および文化の視点から、今後の生き方について参加者と一緒に考える機会とした。

フォーラムは、松本 紘総長の挨拶で開幕し、次いで第一部において、勝見 武地球環境学堂教授が「都市の未来」、安部 浩人間・環境学研究科准教授が「マニュアルなき操縦」、浅利美鈴環境保全センター助教が「ごみは意外に雄弁だ」と題して、それぞれ講演が行われた。次に、第二部では浅野耕太人間・環境学研究科教授がコーディネーターを務め、講演者3名とパネルディスカッションが行われた。



松本総長による挨拶

パネルディスカッションでは、会場から寄せられた質問票にパネリストが回答する方法で進められ、活発な議論が行われた。その後、本学における取り組み紹介として、小林慎太郎地球環境学堂長が文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム『環



パネルディスカッションの様子

境コミュニケーション・リテラシーの向上－プロジェクト型インターン研修によるミニ・プロジェクトワークの組織的展開－』について、塩路昌宏エネルギー科学研究科教授(環境安全保健機構環境・エネルギー管理推進室長)が本学における環境・エネルギー管理の取り組みについて紹介された。



川端文部科学大臣による来賓挨拶

フォーラムに続いて開催された懇談会では、松本総長による挨拶、川端達夫文部科学大臣、望月晴文経済産業事務次官の来賓挨拶があり、宇治則孝日本電信電話株式会社代表取締役副社長の発声による乾杯が行われ、松本総長、理事ほか本学の関係者と参加者との間で和やかな懇親が行われた。

(総務部)

アセアン大学連合(AUN)と学術交流協定をタイ王国教育省高等教育局で締結

本学は、平成21年12月18日(金)にアセアン大学連合(AUN: ASEAN University Network)と持続可能なエネルギーおよび環境研究の分野での交流促進を図るべく、我が国で初めて包括的な学術交流協定を締結した。

アセアン大学連合には、現在、タイ、ベトナム、インドネシア、マレーシアをはじめとする10ヶ国・22大学が加盟しており、このたびの交流協定締結により、これらの国々および大学との共同研究、学術情報交換、研究者交流、学生交流などの幅広い交流が実施される予定である。また、本協定は、アセアン各国の代表的な大学の連合機関と我が国の一つの



京都大学代表团とAUN代表団

大学との協定締結の初めてのケースである。今後、アセアン諸国との発展的な協力関係の構築が大いに

期待できる内容となった。

当日の協定調印式は、本学を代表して江崎信芳理事・副学長、また、アセアン大学連合を代表してピニティ・ラタナクン タイ王国高等教育局副長官(アセアン大学連合評議会議長代理)が出席して、同局において挙行された。アセアン大学連合からは、今

後のアセアン諸国およびユネスコなどの国際機関との連携により、グローバルなプログラムの実施を通じて、国際的な研究交流・人材育成の促進への大きな期待が寄せられた。

(国際部)

新年名刺交換会を開催

平成22年1月4日(月)、恒例の新年名刺交換会を時計台記念館国際交流ホールにおいて開催した。岡本道雄、沢田敏男、西島安則、井村裕夫、尾池和夫の歴代総長をはじめ、多くの名誉教授、理事・副学長、監事、部局長、教職員など約250名の参加を得て、盛大に行われた。

まず、松本 紘総長より新年の挨拶があり、昨年を振り返っての感想と今後の京都大学の方針について、近況報告を含め説明された。特に本年は、干支では「庚寅」の年であり、十干の七番目にあたる「庚(かのえ)」は、前年を受け継ぎ、繰り返し継続、更新するという意味があり、また、「寅」という字は互いに協力して相手にも敬意を表しつつ仕事を進めるという意味があることを述べられ、本年こそ大学が

一丸となって個々人が組織全体を考え、組織は個々人を大切にし、京都大学全体も構成員が努力を重ねていくことが重要との力強い言葉があった。

引き続き、岡本元総長の発声により乾杯し、あちらこちらに歓談の輪が広がった。



松本総長による新年の挨拶

(総務部)

平成22年度入学者選抜学力試験(個別学力検査等)の実施日程

平成22年度入学者選抜学力試験(個別学力検査等)を次の日程で実施する。

前期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
2月25日 (木)	国 語	総人「理系」・教育「理系」・経済「理系」・理・医・薬・工・農	9時30分～11時00分
		総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般・論文」	9時30分～11時30分
	数 学	総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般」	13時30分～15時30分
		総人「理系」・教育「理系」・経済「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時00分
2月26日 (金)	論 文	経済「論文(論文Ⅰ)」	13時30分～16時30分
	外 国 語	総人(独・仏・中)・文・教育・法・経済・理・医「医学科(独・仏・中)・人間健康科学科」・薬・工・農	9時30分～11時30分
		総人(英語)・医「医学科(英語)」	9時30分～11時50分
	地 理 歴 史	総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般」	13時30分～15時00分
2月27日 (土)	理 科	教育「理系」	13時30分～15時00分
		総人「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時30分
	論 文	経済「論文(論文Ⅱ)」	13時30分～15時30分
2月27日 (土)	面 接	医「医学科」	9時00分～17時30分

(学生部)

寸言

百聞は一見にしかず

三宅 良明

昨年度、ある団体が主催する海外研修に参加する機会を得た。その中で中近東のドバイ首長国への訪問は驚きの連続であった。その時の様子を少し紹介してみたいと思う。

数年前からドバイは、日本のマスコミでも数多く取り上げられ、驚異的な発展を遂げている国と言った報道がなされて来た。この国が目指しているのは、中東の地においていわゆる「世界の窓」になることである。法人税を無料にして世界中から6000社にのぼる企業を誘致し、大規模な空港と物流施設を整備し、人と物流のハブ機能を目指し、大規模なリゾート開発、商業開発を次々に行って世界中から観光客を呼び込もうとしている。元々何もなかった砂漠を緑化し、国をあげて街づくりを進めている国家と言ったところである。

初めてドバイと言う国を知った時は、なんとも怪しげな事をやっているなあと言った感想を持った。ファンドで資金を集めて不動産バブルを作っているのではないかと考えたものであった。

ドバイに向かったのは、アメリカ発のサブプライムローン問題に起因した2008年の夏のリーマンショック以降徐々に世界が同時不況に巻き込まれていく中、2009年の2月に出発した。出発直前に現地情報として入ってくるものは、「砂上の楼閣か？ドバイ」、「林立するタワークレーンは動いていない」、「外資が引き上げている」などのマイナス情報ばかりであった。「やはり、そうなんだ。実需が伴わない不動産ゲームだったのか？それならそれを見てこよう」と考えた。閑空からドバイの航空会社である高級さを売り物にしたエミレーツ航空にて「この路線もそのうちに減便かな」と思いつつ飛び立った。

ところが、現地に着いたところドバイはまだまだ元気で活気がある。確かに新規プロジェクトは止まっているようだが、進行中のプロジェクトは大半が



動いているようだ。至る所で建設工事が進められ、事務所、商業施設、ホテル、住宅、リゾート施設、道路、鉄道(この鉄道は総延長76kmの路線で日本のスーパーゼネコンが一括受注している)、運河となんでもありの状態に「ビックリ」である。世界一の高さを目指すビル、ブルジュドバイも完成間近である。リゾート地には高級ホテルが林立しているが、実需も伴っているようである。ヨーロッパ人を中心にちゃんと宿泊客がいる。感覚的にはヨーロッパ人のハワイと言うイメージである。現地の人たちは、日本のある報道機関が、運河を作るために住民と立ち退き交渉をしている段階で歯抜け状態になっている街区を「廃墟化する街」と報道したと怒っていた。また、政府系企業の経営幹部の話を聞くことができたが、その意思決定の速さに驚いた。当然と言えば当然なのだがこの国には議会と言う物が無く、基本的に王族が物事をスピーディーに決めて行くのだと言う。国家の名称どおり首長国なのである。議会制民主主義しか知らない私にとっては「ビックリ」である。国土面積は日本の滋賀県と同じ程度らしい。更にこの小さな国土のうち開発されているのは、ペルシャ湾に面したごく一部である。考えてみれば極めて小さなエリアに極めて高密度に街が作られている。従って見た目には圧倒されるのである。日本が不況と言えども全国の建設中のビルを一か所に集めればこの比ではなかろう、「日本も負けていないぞ！」なんて考えてしまう。逆に「負けるな日本」と勇気を貰った気分が帰国の途についた。

この原稿を書いている最中にニュースが飛び込んできた。ドバイの政府系企業が債務返済の延期の申し出を行うと言う事である。「ドバイショック」と呼ばれた。現地の状況はどうなのだろう？約1年前の出来事の再来である。前回、日本に伝わってきた印象と現地が異なっていたことを考えると、再度ドバイを訪問してみたい気がする。なにはともあれ自分の目で見たいと思う。「百聞は一見にしかず」自分の目で見ることの大切さを強く思うのである。

(みやけ よしあき 株式会社阪急阪神カード
代表取締役社長 昭和55年工学部卒)

随想

フィールドノートのデータベース化を

名誉教授 高谷 好一

随想執筆の機会が与えられたのを利用させてもらって、一つ提案をさせていただきま

す。京都大学でフィールドノートのデータベース化を組織的にやれないかということです。京大は野外調査を大変盛んにやってきた所です。それ



に伴う膨大なフィールドノートが各研究者の手元にあります。それを組織的に集積、保存、公開する仕組みができないかということです。

私は東南アジア研究センターに30年近くおり、その間にいくつかの所に調査に参りました。東は太平洋のトンガ、フィジーから西はマダガスカルに参りました。期間は1967年頃から2000年頃までです。その間に訪れた先々で見聞きしたことを記録してあるのです。ひところは胸のポケットに小型のテープレコーダを忍ばせて、見るもの、聞くもの、何もかも録音していました。それをその日のうちにノートに写したのです。何もかも録音したものですから記録は膨大なものになりました。

最近になってそれを読み返して、これはなかなかいいデータではないかと思うようになったのです。例えば、こんなことがあるのです。40年前に記録したものがありますが、そこに最近行ってみると、もうすっかり様子が変わっていました。記録は既に歴史的な価値を帯びているのです。こんなにも変わってしまったのか、記録しておいて良かったな、と思ったのです。

私はフィールドノートの作成とは別に岩石や土壌のサンプリングもしていました。しかし、こちらの方は保管場所が無くて最近廃棄しました。捨ててしまってから、何ともったいない事をしてしまったのか、取り返しのつかない事をしたな、と盛んに悔やんでいる次第です。

フィールドノートの場合、保管に困るといってそれを捨ててしまっている人はまさかないでしょう。

その意味ではフィールドノートのデータベース化は今ならまだ間に合います。散逸してしまわない内に、是非、集積しておきたい。そう思うのです。

試しに私は手書きのフィールドノートをデータ化しました。自分だけにしかわからない暗号なども文字化して、誰にでも利用してもらえる形にしたのです。写真やスケッチなども対応する場所にはめ込んで見やすくしました。暗号の文字化や写真の添付はしましたが、あくまで元のノートの復原です。丁度、1年前に始めたのですが、現在までに出来上がったものは、文字数でいうと40万字ほどになります。

出来上がったものを数人の仲間に見せると面白い、続ける価値があるということになりました。それで現役の教員にお願いして、科研費を申請して貰うことにいたしました。目下の計画は、とりあえず4人が組んで3年をめどにやってみる。その間にはA4紙で1万枚ほどの製品が作れるという計算です。わたし達は、これはほんのサンプルだと考えています。ここから膨らむことを考えているのです。

冒頭にも述べたように京大はフィールド調査を随分やって来た大学です。その一次資料が散逸する前に何とかして集積しようではないかというのが私のいいたいことなのです。サンプルをみていただいて、よし一緒にやろうといってくれる同志が出てくることを強く期待しているのです。

この種の仕事は現役の時にはなかなかやれないものです。一次資料を集めるのに精一杯だからです。そういう意味ではフィールドノートの整理などという仕事はOBの仕事ということになるのでしょうか。OBにはOBなりの仕事があると今頃になって気付いて、こんなことをいっているのです。

大学の最も大事な仕事は世界に冠たる第一級の論文を書くことです。しかし同時に、中央にある大学は基礎になる資産を充実させることも大変大事なことでと考えます。それが第一級の大学の重みというものだと思います。重みのある京都大学ということが頭の中にあってこんなことを書いている次第です。

(たかや よしかず 平成7年退職 元東南アジア研究センター教授、専門は地域研究)

洛書

21世紀COEプログラム奮闘記

森 直樹

平成16年4月から平成21年3月まで、21世紀COEプログラムの革新的な学術分野として、農学研究科とフィールド科学教育研究センターが「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」の事業展開に取り組んだ。本寄稿は、このプロジェクト運営を末席から見た奮闘記である。



本プログラムの拠点リーダーは農学研究科応用生物科学専攻の藤崎憲治教授であり、事業推進担当者は総勢18名。丁度その頃、筆者は藤崎教授と共同研究を進めており、申請段階から本プログラムに携わる機会を得た。

まずは1ヵ月で申請書の骨子を完成させねばならず、藤崎先生を含む5人で対応した。この時間的制約も厳しかったが、厄介な敵は他にいた。「学内選考に残れるのか？仮に残れても、さらに激烈な競争を勝ち抜き、最終的に文科省から採択されるか？」と囁く悪魔である。心のどこかで「勝ち目が低い」と見ている戦いに膨大な時間とエネルギーを費やし、最善を尽くすのは難しかった。

平成16年7月下旬、幸運にも我々のプログラムが採択された。全部で28件であった。採択されてからは、申請書に記した研究・教育計画を必死でこなした。瞬く間に1年半が過ぎ、中間評価を迎えた。平成18年3月に進捗状況報告書を作成し、5月の東京でのヒアリングを経て、7月にはCOE評価委員の先生方が直接来学される現地調査が行われた。そして、中間評価が9月に発表された。残念ながら「当初計画の適切な変更が必要」という評価で、採択プログラム中ただ一つのC評価であった。今から考えると、ビッグプロジェクトに対する我々の経験不足もあって、準備が不十分だったと思う。

これ以降、進捗状況報告書の修正変更版の提出(平成19年3月)を含め、プログラムを基本から練り直した。この期間中、COE評価委員の先生方のご指導や京都大学の関係の先生方から多大なご尽力を頂き、何とか軌道修正した。

この逆境の中、思わぬ効果が生まれた。学生を含めた若手研究者と事業推進担当者が一丸となって本プログラムの危機を乗り越えようと団結したのである。それに加え、我々の七転八倒振りを間近で見ていたポスドクや学生に、「自分達がしっかりやらねば誰がやる」との気概が高まった。これらの作用が相乗効果を生み、プログラムの後半には多くの若手研究者達が目を見張る成果を出し始めた。最終的にはこの経験が評価されたのであろう、本プログラムの博士課程修了者・ポスドク経験者は、広島大学准教授・九州大学助教・島根大学助教・大阪府立大学助教・秋田県立大学助教(2名)・京都大学化学研究所助教・大阪人間科学大学講師・農業食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター研究員・千葉県職員として採用されたのをはじめ、民間企業では松下電器産業・(株)クレハなどにも就職した。就職難の時代に、大変有難かった。

平成21年5月に事業結果報告書を提出した。この奮闘記が洛書欄に掲載される頃には、既に最終評価が下されているはずである。中間評価のようなことはないと期待している。とは言え、もう少し昆虫科学の大きな広がりや世に訴えたかったことも事実である。それが十分に出来なかったのは、我々の力不足ゆえである。しかし5年間の本プログラム運営を通して、確かに若手研究者や学生の成長を実感した。これは大きな楽しみ・喜びであった。また、自分達が展開している研究の価値を社会にどの様に訴えていくのか、これについても考えさせられた。行政刷新会議で基礎研究も含めた事業の仕分け・予算の縮減が検討されている今、この意識は益々重要になっていくだろう。

非常に多忙な時期もあったが、本プログラムを通して大変貴重な経験をさせて頂いた。また、拠点リーダーの藤崎先生は常にご多忙であった。種々のプレッシャーを感じておられたと推察するが、一切表に出さず最後まで全メンバーを率いて下さった。本当にご苦勞様でしたと言いたい。以上が私の個人的な感想である。最後になったが、本COEの運営に当たり、COE評価委員の諸先生・京都大学の関係の諸先生・事務の方々には大変お世話になった。心から御礼を申し上げる次第である。

(もり なおき 農学研究科准教授、専門は化学生態学)

栄誉

平成21年度医学教育等関係業務功労者の表彰

文部科学省は、医学又は歯学に関する教育・研究もしくは患者診療等の業務に関し、顕著な功労のあった方々を対象に毎年表彰を行っております。平成21年度医学教育等関係業務功労者表彰式が平成21年11月25日(水)に行われ、黒田伸之医学研究科附属総合解剖センター技術専門職員、小倉紀美子医学部附属病院看護部副看護師長が文部科学大臣表彰を受けられました。

以下に両氏の業績等を紹介します。

黒田伸之医学研究科附属総合解剖センター技術専門職員は、長年にわたり医学研究科、医学部附属総合解剖センターで献体業務、解剖実習補助業務に携わり、解剖実習の教育基盤を支え、医学の進展に陰の力と



して多大な貢献を行ってこられた。

また、同氏は、後進の技術者、若手研究者に遺体防腐処置、遺体管理並びに解剖技術を指導し、多くの熟練者を生み出し、この分野の研究・教育に多大な貢献をされ、医学の発展に寄与された。

(大学院医学研究科)

小倉紀美子医学部附属病院看護部副看護師長は、38年の永きにわたり、内科・外科・小児科および内科外来の看護業務に従事し、患者中心の看護の構築に尽力された。



の調整を図り、業務改善を遂行された。

一方、結核・SARS・新型インフルエンザの対応においては、感染症対応病棟の業務調整役として、中心的な役割を果たされた。

(医学部附属病院)

また、看護師長・スタッフ間

話題

第17回日本学術振興会拠点大学交流事業「都市環境」日中合同会議を開催

工学研究科で実施している JSPS 拠点大学交流事業に関連し、平成21年10月26日(月)、27日(火)の2日間にわたり「第17回 JSPS 拠点大学交流事業『都市環境』日中合同会議」が、桂キャンパスCクラスター人融ホールにて開催された。

本事業は、自然との共存・共生を目指す資源循環型社会の構築を目的として平成13年度より開始され、今年度で9年目を迎える。今回の会議では全4グループの研究者が



記念品を交換する大鷲工学研究科長とHAO清華大学教授

一堂に会し、最終年度にあたる平成22年度に出版を目指しているテキストの内容を中心に、2日間にわたって活発な議論が行われた。今回は中国から32名の研究者が来日し、国内研究者と合わせて100名以上が参加した大きな会議となった。

セミナー初日には、大鷲幸一郎工学研究科長とコーディネーターである津野 洋教授から挨拶があり、中国側のコーディネーターである HAO Jiming 清華大学教授と記念品の交換を行った。両国のコーディネーターは、今後も学術交流をより一層積極的に続けていくことで合意した。

今後も工学研究科では、このような国際交流事業を通じ、多くの学術成果を挙げていくとともに、途上国等の環境問題解決という観点から、国際社会への貢献を進めていく予定である。

また、本事業に関連し、10月26日(月)に HAO 清華大学教授をはじめとする訪問団一行が本学役員等を訪問された。西村周三理事・副学長のほか、森 純一国際交流推進機構長、大寫工学研究科長、津野教授、小林潔司教授らが一行を迎え、本学と中国の大学と



日中合同会議集合写真

の交流について意見が交換された。

懇談では、現在、工学研究科が行っている中国との拠点大学交流事業や清華大学との遠隔講義の話を中心に、終始和やかなムードで意見交換が行われた。



訪問団一行と本学役員等との集合写真

(大学院工学研究科)

森林科学公開講座「森と、地球と、それから私」を開催

生存圏研究所と農学研究科森林科学専攻の共催により「平成21年度京都大学森林科学公開講座」を平成21年10月31日(土)・11月1日(日)に開催した。この公開講座は、我々にとって森林や樹木がいかに重要であるかを深く理解してもらうことを目的として毎年開催しているもので、今年度は「森と、地球と、それから私」と題して、地球上に広がる森林の様々な側面での人間生活との関わりについて考えてみることをテーマにした。初日は、新しく開館したばかりの「宇治おうばくプラザ」のホール(きはだホール)



きはだホールでの講演

で、5人の講師が講演を行い、61人の参加者が熱心に聴講した。

また、2日目には研究の現場を実際に体験してもらうために、「木材を使って電波を知ろう」、「宇治十帖を歩く、源氏物語の民族植物学」、「家を支える木組みのチカラー伝統技術に学ぶ現代の家造りー」という3つのコースに分かれて、見学と実習を行った。

晴天にも恵まれ、2日間での参加者数は、当初の募集人数を超える82名に達した。



研究現場体験「宇治十帖を歩く、源氏物語の民族植物学」

(宇治地区事務部)

細胞エンジニアリングの2009年世界大会(iGEM)で京都大学学生チームが銀賞を受賞

平成21年10月31日から11月2日まで開催された細胞エンジニアリングの世界大会(The International Genetically Engineered Machine competition, 通称 iGEM)で京都大学学生チームが銀賞を受賞した。

iGEM とは、マサチューセッツ工科大学(MIT)が主催するシンセティック・バイオロジー(Synthetic biology)の国際大会である。2009年度は世界各国から112チームが参加する過去最大の規模となった。プロジェクトの決定からテーマの組み立て、実際の実験と英語での発表までを学部学生が主体となって行うというユニークな大会である。参加者は、あらかじめ大会本部から送られてくる遺伝子の「標準パーツ」やチーム独自に設計した遺伝子を組み合わせることにより、新たな機能を持った細胞をつくる。そのアイデアの独創性や新規性、社会的意義に加え、実験で達成した成果をMITで口頭・ポスター発表し、その出来映えを競う。

iGEM 京都大学チームは2008年度に結成され、メンバーは様々な専攻の学部学生を主体とし、加えて修士院生とアドバイザーから構成されている。初参加の昨年度の大会では受賞を逃したが、今回は次の二つのユニークなプロジェクト(Time Bomb と Cells in cells)で挑んだ。

1. Time Bomb ~ Gene Switch Depending on Duplication (GSDD) 分裂依存的タンパク質発現機構~

「Time Bomb」は、文字通り「細胞時限爆弾」であるが、危険なものではなく、バクテリアなどの細胞を産業利用するために、「あらかじめ決められた時間後に不要となった細胞を除去する」ことを目指した研究である。

2. Cells in cells ~細胞内共生系の再構築による細胞の本質へのアプローチ~

「細胞とは何か?」。この質問に自力で答えるために、今年の京大チームは、ミトコンドリアのシステムを利用し、人工的な細胞内共生システムを創ることを目指した。

これら二つのテーマを掲げて参加した京大チームは、大会初日に英語での口頭プレゼンテーションを200名近くの聴衆を前に行った。さらに2時間に及ぶポスター発表での質疑応答の後、審査を経て銀賞を獲得した。昨年、全く賞を獲得できなかったこと



ポスター発表の様子

を考えると大きな躍進であった。また、プロジェクトの斬新さ・新規性に対する聴衆の評価は高く、多くの人から「面白かった」「非常にユニークだ」と評価していただいた。参加した学生からは、「良い経験になった」「大変な時期もあったがやり遂げてよかった」「来年も是非参加したい」といった声が挙がっている。それぞれの学生にとって非常に貴重な体験であり、将来この経験が十分に生かされることになると思われる。

iGEM は、学部学生が研究現場の醍醐味を実際に経験し、その成果を自ら国際的に発信できる貴重な機会である。その活動は実験のみならず、チーム Web サイトの作成、シミュレーションなど幅広い活動内容があり、文系理系を問わずどの学部の方にも活躍の場があるので、多くの方の参加を期待する。

この大会に興味を持たれた学生、教員の方は、次の iGEM Kyoto チーム連絡先まで。

E-mail: iGEM.Kyoto@gmail.com

<http://openwetware.org/wiki/IGEM:Kyoto/2010/>



MIT での iGEM 京大チーム記念写真

(大学院生命科学研究科)

シンポジウム「第2回サービス・イノベーション国際シンポジウム」を開催

経営管理大学院は、平成21年11月13日(金)芝蘭会館において、文部科学省サービス・イノベーション人材育成推進プログラムの一環として「第2回サービス・イノベーション国際シンポジウム」を開催した。

前半では、成生達彦院長からの開催趣旨説明のあと、原 良憲教授から、来年度開設予定の「サービス価値創造プログラム」の概要を紹介した。基調講演Ⅰでは、経済産業省製造産業局次長の永塚誠一氏から「我が国経済の現状と課題」として、我が国が得意とする高度な技術に運営・管理や部品製造なども組み合わせ、一貫したビジネスとして提案できるインテグレーターを育成することなどが提案された。それに続く基調講演Ⅱでは、住友スリーエム社社長



ジェシー・G・シンによる基調講演

のジェシー・G・シン氏から“Leveraging lean and localization to create value for the customer”と題して、「カイゼン」活動などで示された日本の生産性を顧客にとってより価値を生むために展開・統合する方向性などが示さ

れた。基調講演Ⅰ・Ⅱの司会を担当した小林潔司教授からは、サービスもパッケージ化して国際化を目指すこと、そうした夢を描いてそれを実現していく姿勢などが、まとめとして強調された。

後半はテーマを「関西(京都・大阪)からサービス価値創造を」とし、合同会社きょうと情報カードシ

ステム(KICS - LLC)総務委員会委員長の樋爪 保氏、特定非営利活動法人アントレプレナーシップ開発センター理事長の原田紀久子氏、大阪商工会議所経済産業部長の中川正隆氏の3名を招き、前川佳一准教授のコーディネートのもとパネル討論を行った。その中で、たとえば非常にユニークで先進的なモデルである KICS - LLC のビジネスを他の地域に展開できるのか、また、それはどのようにといった観点から討論が繰り広げられた。

結びとして日置弘一郎教授からは、この日の講演や議論の内容を踏まえ、サービスの生産性という概念を捨ててしまうことで、よりサービスの本質に迫るといった試みも含めて、教育プログラム開発を進めるという意思表示がなされた。

当シンポジウムへは、多種多様な産業・学術分野から大勢の参加者が集まり、そのほとんどの方が前後半を通して熱心に聴講され、また質疑に活発に参加された。参加者からは、本学の「サービス価値創造マネジメント」教育プログラムが掲げる「文理融合型アプローチ」ならではのバラエティに富んだ内容であった、などの意見が寄せられ好評を博すシンポジウムとなった。



パネル討論の様子

(経営管理大学院)

テクノ愛'09最終選考会を開催

平成21年11月23日(月・祝), ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)にてテクノ愛'09最終選考会が開催された。テクノ愛'09は「ベンチャー精神を持つ人材育成」や「ユニークなアイデアの社会での活用」支援を目的としたもので, 全国から431件(高校の部300件, 大学の部131件)の応募が寄せられた。

一次審査を通過した18件(高校, 大学の部各9件)の最終選考会には多くの来聴者があった。申請者から試作品の紹介も含めた意欲あふれるプレゼンテーションがあり, 審査委員からの厳しい質問とともに, 会場からも活発な質疑応答がなされた。また本年度は, 本コンテストで過去3度の受賞経験のある岡本晃一工学研究科特命准教授により, 最新の光技術に

関する記念講演が行われ, 参加者の強い興味をひいていた。

審査の結果, 高校と大学の部でグランプリ, 準グランプリなどの各賞が確定し, 受賞者には表彰状, 盾とともにホームシアターセット等豪華賞品の贈呈もあり, コンテストは大盛況のうちに終了した。高校の部グランプリを受賞した提案は, 有袋栽培により全体が白いリンゴを初めて作り, さらにメッセージを伝える贈答用の商品とする内容のもので, ビジネスプランとしても高い評価を受けた。なお, 会の運営, 最終選考の審査結果も含めウェブサイト(<http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/techno-i/>)で公開している。



最終選考発表者(高校の部)の記念撮影



最終選考発表者(大学の部)の記念撮影

最終審査受賞者一覧(敬称略)

高校の部	グランプリ 「メッセージ・アップル」 佐藤絵梨香, 梅田 愛, 佐々木愛美, 船場 美夏, 山田 奈菜(青森県立名久井農業高等学校)
	準グランプリ 「触れずに動かすタッチパネル～ゲーパーマウスの開発～」庄野 裕貴(奈良女子大学付属中等教育学校)
	財団法人近畿地方発明センター賞 「香りジェル付き吸着マスク」白敷 優衣(京都府立洛北高等学校)
大学の部	グランプリ 「音楽構造の視覚化, 解析, および応用」中嶋 研人(近畿大学)
	準グランプリ 「忘れなコースター」弘光 正岳, 野口 直起, 政木 佳奈, 山田 徹(京都工芸繊維大学)
	京都大学VBL施設長賞 「高速道路の自然渋滞を解消する環境に優しいシステムの考案」大俣 美佳(中部大学)

(ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)

尾池和夫前総長肖像画贈呈式を挙行

平成21年11月25日(水)に、百周年時計台記念館において、尾池和夫前総長ご夫妻をお招きし、松本 紘総長、東山紘久前理事・副学長、江崎信芳理事・副学長、大西珠枝理事・副学長、塩田浩平理事・副学長、西村周三理事・副学長、吉川 潔理事・副学長、部局長、事務本部部長、尾池前総長の秘書経験者等、四十数名の関係者列席のもと、尾池前総長肖像画贈呈式を挙行した。

贈呈式の開会にあたり、尾池前総長退職記念事業実行委員会委員長である松本総長から、尾池前総長が退任されてからの約1年間の京都大学の動きについての紹介や、尾池前総長によって培われた広報、産官学連携、共同研究、地域連携等のアウトリーチ活動について、積極的かつ着実に取り組んでいる旨

の挨拶があった。

引き続き、松本総長から尾池前総長に目録が贈呈され、尾池前総長ご夫妻による肖像画の除幕、花束の贈呈が行われた。

その後、肖像画を制作された鶴田憲次京都市立芸術大学美術研究科長から、肖像画制作にまつわるエピソードなどが紹介された。

最後に、尾池前総長から総長時代の数々の思い出や、現在所長をされている財団法人国際高等研究所におけるご活躍の状況、また、鶴田氏とは鉱物や化石についての話題で楽しい時間が過ごせたことなどが語られた。

肖像画贈呈式に続いて開催した会食では、尾池前総長ご夫妻を囲み、和やかな雰囲気での歓談が行われた。



尾池前総長ご夫妻による肖像画の除幕



肖像画前の尾池前総長

(総務部)

国立大学附置全国共同利用研究所・研究センター協議会第6回総会を開催

京都大学が当番となり、平成21年11月27日、国立大学附置全国共同利用研究所・研究センター協議会第6回総会を稲盛財団記念館で開催した。



松本総長による挨拶

総会では、議長に当番機関の松沢哲郎霊長類研究所長を選出し、続いて当番大学を代表して松本 紘

総長の挨拶があった。次に勝野頼彦文部科学省研究振興局学術機関課長から、①予算、②行政刷新会議、③第二期中期目標・中期計画、④科学技術・学術審議会学術分科会の動向について説明があった。

議事に入り、前回総会以降の協議会の活動報告が行われた後、協議事項①平成21年度役員の選出について、②「国立大学共同利用・共同研究拠点協議会」(仮称)について、③平成22年度以降の当番機関について、④「事業仕分け」等を踏まえた政府への要望について協議された。

最後に山中伸弥教授より、iPS細胞研究の内容と課題について特別講演が行われ、約100名の出席者は興味深い内容に熱心に耳を傾けられた。

(霊長類研究所)

シンポジウム「内部統制報告・監査の現状と課題」を開催

経営管理大学院では、平成21年11月28日(土)大阪国際会議場において、「会計専門職の学び直しを支援する短期集中教育プログラム」(文部科学省委託事業)の一環として、シンポジウム「内部統制報告・監査の現状と課題」を開催した。

今回のシンポジウムは、昨年度から上場企業に義務付けられた内部統制報告およびその監査における諸問題について、議論することを目的としたものである。

成生達彦経営管理大学院長の挨拶にはじまり、野村昭文氏(金融庁総務企画局企業開示課企業会計調整官)より、「監督官庁からみた現状と課題」をテーマに基調講演が行われた。

基調講演では、初年度の内部統制報告の提出状況や、報告書におけるIFRS(国際財務報告基準(International Financial Reporting Standards))への対応、また、円滑な実施に向けた今後の取り組みについて発表が行われた。

続いて、増田宏一氏(日本公認会計士協会会長)より「会計士の立場から見た現状と課題」、谷口進一氏(新日本製鐵株式会社代表取締役副社長)より「企業の立場から見た現状と課題」、また、曳野孝氏(経営管理大学院准教授)より、米国版SOX法(企業改革法(Sarbanes-Oxley Act))を例に挙げて「企業統治

の立場からみた現状と課題」について、それぞれ課題提起が行われた。

その後、野村昭文氏もパネリストに加わり、コーディネーター澤邊紀生教授の進行によりパネルディスカッションが行われた。



会場の様子

パネルディスカッションでは、内部統制報告・監査の定着度合、内部統制にかかるコストとベネフィット、提出企業の温度差の問題、また、初年度の知見を活かした今後の課題等について活発な議論が行われた。

このシンポジウムには、公認会計士、企業のマネジメント関係者、コンサルタント、学生や教員等計106名が参加し、パネルディスカッションの最後には会場との質疑応答も行われた。募集予定人数を上回る参加申し込みがある盛況ぶりで、満席となった会場では、熱心にメモを取りながら耳を傾ける姿が多く見られた。

最後に、西村周三理事・副学長より挨拶があり、盛況のうちに閉会となった。



西村理事による閉会挨拶

(経営管理大学院)



パネルディスカッションの様子

グローバル COE プログラム「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」が ウィーン大学知識ビジネス工学科と連携

グローバル COE プログラム(情報学研究科・学術情報メディアセンター「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」(拠点リーダー:田中克己教授))は、平成21年11月30日、オーストリアのウィーン大学知識ビジネス工学科(University of Vienna, Department of Knowledge and Business Engineering)と教育研究に関する部局間協定、並びに学生交流に関する覚書を締結した。

本協定では、知識サーチ、イノベーションマネジメントなどを含む知識循環社会に関する共同教育研究を対象とし、同プログラムにおける人材育成推進のための国際的教育研究の拠点形成を推進するものである。

今回の協定締結により、情報学における共同教育

研究や学生交流のみならず、経営学をはじめとする複合学際領域での学術交流がさらに活発に行われることが期待される。



ウィーン大学の外観

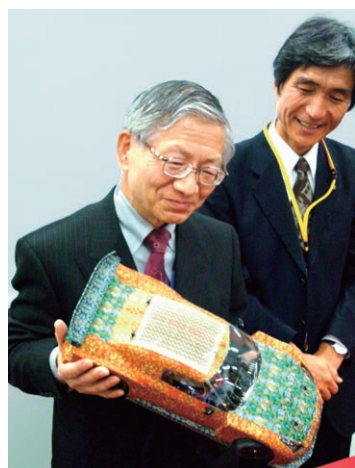
(大学院情報学研究科・学術情報メディアセンター)

京都風電気自動車(Kyoto-Car)の新作コンセプトカーを発表

平成21年11月30日、京都大学東京オフィスにおいて、本学と京都市産業技術研究所、地域のベン

チャー、関連企業が共同開発した新たな京都風電気自動車(Kyoto-Car)の新作コンセプトカー二種類を公表した。

世界的な関心事となっている地球温暖化防止策の一つとして、走行時CO₂を全く排出しない電気自



コンセプトカーを持つ松重教授

動車への関心が高まっている。本学ではベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)や工学研究科電子工学専攻松重和美研究室を中心に、ベンチャー企業や関連企業等との産学公連携で、先端科学技術と伝統文化・芸術が融合した京都風電気自動車(Kyoto-Car)の開発に取り組んでいる。これまで、ナノテクやロボットテクノロジー等の最先端技術、京友禅(コンピュータ・グラフィックス)や漆などの伝統工芸・自然素材を取り入れた「粋」で格好良く、また、環境に優しい1/10スケールのコンセプトカー、さらに走行可能な京都風木型および竹型電気自動車(通称 Bamgoo)や電動アシスト人力車等を開発し、発表してきた。

今回は、京友禅模様および西陣織をコートした車体全面に、微小球状太陽電池(京セミ製 スフェラー®)を設置した Kyoto-Car 二種類を公表した。色鮮やかな車体に新型太陽電池を付加したエコカーは、その発想とともに日本伝統文化の豊かさが大いに関心を呼び、各種新聞やインターネットでも写真入りで

報道された。

参照 HP

<http://www.kyoto-car.jp>

<http://piezo.kuee.kyoto-u.ac.jp/1090.html>

<http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/Projects/Kyoto-Car/>
(大学院工学研究科)

平成21年度能楽鑑賞会を開催

第53回京都大学能楽鑑賞会が平成21年12月2日に京都市左京区の京都観世会館で開催された。この能楽鑑賞会は、創立記念行事音楽会とともに本学学生・教職員のための課外教養行事として毎年開催されているものである。

今回の演目は、狂言「文荷」と能「融」で、会場は超満員となった。狂言のコミカルな演技では笑いに包まれ、能の優美な舞では伝統芸能の豊かな世界に会場全体が魅きこまれている様子であった。

当日実施したアンケートでは、「初めて観たのに楽しめた」、「西洋の舞台と日本の舞台の違いに驚いた」、「難しかった。基本知識を勉強してからまた観てみたい」といった声のほか、「能・狂言に限らず様々な伝統芸能・文化の課外教養行事を開催してほしい」といった声も聞かれた。

普段は実際に触れる機会の少ない「伝統芸能・文化」にも、本鑑賞会をきっかけとして理解と関心を深めてもらえるよう、今後も企画して行く予定である。



超満員となった能楽鑑賞会の様子

(学生部)

AEARU(東アジア研究型大学協会)「15th Annual General Meeting」および「25th Board of Directors Meeting」を開催

松本 紘総長が議長を務める“The Association of East Asian Research Universities(AEARU)”のBOD(理事会)およびAGM(年次総会)が、平成21年12月2日(水)から12月4日(金)の間、東北大学の主催で仙台市内のホテルおよび東北大学片平キャンパスにおいて、日本6校、中国4校、韓国3校、台湾2校、香港1校の計16校の研究型大学から、学長・副学長を中心に約50名が参加して開催された。



BOD(理事会)の様子

本学からは、松本総長のほか小寺秀俊副理事(総長室長)、森 純一副理事(国際交流推進機構長)および国際部から3名が出席・随行した。松本総長の議事進行の下、2日午後開催のBODでは2009年末で任期満了となる議長の後任およびメンバーの交代

等について審議され、次期議長には現在副議長である香港科技大学 Tony F. Chan 学長の就任が確認された。翌3日のAGMでは、本年度の事業報告と次年度の事業計画および当番校等が決定し、副議長校には清華大学(台湾)が選出された。その後AEARUの運営全般に関する活発な意見が交わされ、盛会の内に閉会した。



AGM(年次総会)の様子

本学は2008年1月に浦項工科大学(韓国)から議長校を引き継ぎ、尾池和夫前総長および松本総長が議長に就任し、2009年末をもって香港科技大学に議長校を交代することになった。
(国際部)

化学研究所「第109回研究発表会」を開催

化学研究所は、平成21年12月4日に宇治おうばくプラザきはだホールにおいて、第109回研究発表会を開催した。

午前の部では、平井諒子助教による「バクテリアセルロースの結晶多形の制御とそれに伴う高次構造の発現」、井上倫太郎助教による「高分子薄膜のガラス転移」、徳田陽明助教による

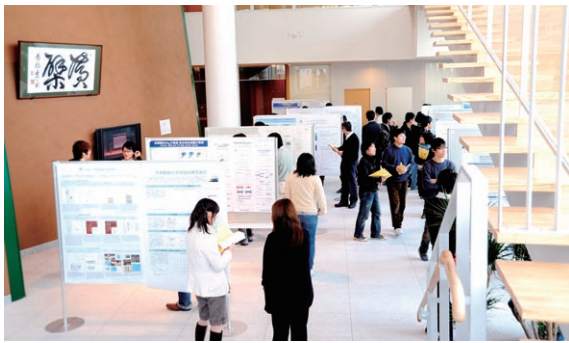


時任所長(中央)と受賞者4名

「有機無機ハイブリッド材料の構造設計と機能制御」、想田 光助教による「共鳴結合による $^{24}\text{Mg}^+$ ビームの横方向レーザー冷却」の発表が行われた。

午後の部では、京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞の授与式ならびに受賞者4名による講演が行われた後、きはだホールホワイエにて66件のポスター発表が開催された。その後、瀧川一学助教による「遺伝子発現情報を用いた代謝経路推定」、M. Lutfi Firdaus 助教による「Sectional Distribution of Zr, Hf, Nb, Ta, Mo and W in the Southern and South Pacific Ocean」、栗原達夫准教授による「南極における微生物の生存戦略」と題した発表があり、いずれのセッションも活発な質疑応答が行われた。

最後に時任宣博所長から閉会の挨拶があり、「新



ポスター発表会場風景

しいホールで講演者は気持ちよく発表できたと思う。来年もより多くの参加者が集い、活性化することを願う」と今後の研究を激励する言葉で結んだ。

本研究発表会は、一般、専門機関、所内から120名を超える参加者を得て、非常に分かり易く興味深い研究成果が発表される活気ある会となった。終了後は、教職員・大学院生等250名の参加を得て、研究発表会懇親会がおうばくプラザハイブリッドスペースにて盛大に行われた。

(化学研究所)

第13回京都大学国際シンポジウムを開催

平成21年12月11日(金)から13日(日)にかけて、時計台記念館百周年記念ホールにおいて、「第13回京都大学国際シンポジウム：学術研究における映像実践の最前線」を開催した。同シンポジウムは、本学が誇る独創的な学術研究を世界に語りかけ、国際的に開かれた大学としての活動を積極的に展開していくために、平成12年度以降毎年世界各地で開催している。今回のシンポジウムは、京都大学教育研究振興財団の後援を得て開催し、3日間で延べ約420人の参加があった。内外の研究者や学生のみならず学界外からも多数の方々が集まり、大きな盛り上がりを見せた。



映像による松本総長の挨拶

シンポジウム1日目は、松本 紘総長の挨拶で開幕。映像上映による挨拶であったが、奇しくも本シンポジウムのテーマに沿ったかたちとなった。続いて、本シンポジウム実行委員長の田中耕司地域研究統合情報センター教授から趣旨説明の後、土佐尚子学術情報メディアセンター特定教授によるオープニング上映が行われた。

その後、セッションⅠ「海洋生物がみせる海」、セッションⅡ「脳科学と映像」、セッションⅢ「宇



田中実行委員長による趣旨説明

宙物理学と映像」が行われた。

同日夕、国際交流ホールでのレセプションは、吉川 潔理事・副学長の挨拶、西村周三理事・副学長の乾杯でスタート。今回のシンポジウムでの発表者の専門分野は幅が広く、普段お互いに顔を合わすことのない研究者同士の親交の場となった。

2日目は、セッションⅣ「映像がとらえる野生動物」、セッションⅤ「映像メディアとエスノグラフィ」、セッションⅥ「映像メディアとアクティヴィズム」が行われた。

3日目は、セッションⅦ「ヴィジュアル・イメージと社会－親密圏と公共圏の再編成に向けて－」、セッションⅧ「ヴィジュアル・イメージと物語」、セッションⅨ「カルチュラル・コンピューティング－文化・無意識・ソフトウェアの創造力」が行われた後、まとめとして田中教授の総司会でセッション担当者や若手研究者を交えた総合討論が行われた。活発な意見交換が展開され、熱気溢れるうちに幕を閉じた。

学術研究における映像にかかわる実践に注目したこのような分野横断的な学際シンポジウムは、世界的にも類をみないもので、今後、映像を通じた新たな学術領域の開拓の第一歩となることが期待される。



セッションⅣの様子

(国際部)

第3回京都大学オープンコースウェア総長懇談会を開催

平成21年12月15日(火)午後3時30分から、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、松本 紘総長、大西有三理事・副学長、西村周三理事・副学長、大西珠枝理事・副学長、大野照文総合博物館長、森 純一国際交流推進機構長、山本行男高等教育研究開発推進機構長をはじめ55名の教職員等の出席を得て京都大学オープンコースウェア総長懇談会を開催した。

同懇談会では、松本総長の挨拶の後、西村理事・副学長による「OCW をどう推進すべきか」、土佐尚子学術情報メディアセンター特定教授による「OCW の現場」並びに美濃導彦学術情報メディアセンター長による「OCW の組織化」の講演が行われた。続いて、美濃学術情報メディアセンター長の司会により「総長との討論」と題して、学内での関連組織との住み分けと連携、戦略、期待することについて、活発な意見交換が行われた。

懇談会終了後には懇親会が開催され、松本総長、



意見を述べる松本総長

コンテンツ提供教員らと交え、オープンコースウェアの意義について意見交換が行われた。

なお、OCW 総長懇談会の内容については、京都大学オープンコースウェアのトップページ(<http://ocw.kyoto-u.ac.jp>)で公開している。

OCW は、本学で行われている講義の教材をウェブで公開し、人類の知的財産の蓄積に貢献するとともに、本学のビジビリティを高め、世界中から優秀な教員、学生を集めることを目的としたものである。現在199の講義ノートと477の映像コンテンツに加え湯川秀樹先生、西田幾多郎先生の紹介 OCW がアップされている。今後は英語による授業講義映像を含め、より一層広い世界へ本学の知の財産を発信提供していく予定である。



活発な意見交換がされた懇談会の様子

(教育推進部)

マレーシア工科大学副学長が本学を訪問

平成21年12月21日(月)、Zaini Ujang マレーシア工科大学(以下 UTM)副学長一行(計4名)が本学を訪問された。吉川 潔理事・副学長のほか、森 純一国際交流推進機構長、塚本政雄国際部長、八尾 健エネルギー科学研究科長、小林慎太郎地球環境学学長および UTM と本学の部局間学術交流協定のコー

ディネーターである松岡 譲工学研究科教授らが一行を出迎え、本学と UTM の交流について意見交換がなされた。

懇談では、まず松岡教授から UTM と本学との交流実績および部局間学術交流協定に至った経緯について説明があった。その後、双方が用意した資料を

元に、本学側からは大学紹介と白眉プロジェクトおよびG30を中心とした国際交流の取り組み状況についての紹介が、UTM側からも研究者養成プログラ



懇談の様子

ムおよび国際交流の状況についての紹介がなされた。懇談は終始和やかな雰囲気で行われ、両校はこれまでの関係を維持、発展させていくことで合意した。

その後、Zaini 副学長一行は、エネルギー科学研究科の塩路昌宏教授および坂 志朗教授を訪ね、最新の研究事情や同研究科と UTM との関わりについて話し合われた。また、午後からは、同日開催されていた藤井滋穂地球環境学堂教授主催のセミナーで Zaini 副学長



Zaini 副学長に説明する塩路教授

自らが UTM を紹介するプレゼンテーションをされるなど、精力的にスケジュールをこなされた。

(大学院工学研究科)

訃報

このたび、^{おだ じゅんいち}小田 順一 名誉教授、^{ひ だかとしたか}日高敏隆名誉教授、^{し で いつなひで}四手井綱英名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

小田 順一 名誉教授



小田 順一先生は、平成21年10月21日逝去された。享年74。

先生は、昭和34年3月京都大学農学部を卒業され、同40年4月より京都大学化学研究所助手として勤務され、同48年11月同助教授、同59年1月同教授に昇任され、平成4年4月から同6年3月まで京都大学化学研究所長を務められた。平成10年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後、平成17年3月まで福井県立大学生物資源学部教授を務められ、その間、同大学大学院生物資源学研究科長、同大学生物資源学部長を歴任され、福井県立大学名誉教授の称号を受けられた。その後、平成20年3月まで同大学客員教授を務められた。

先生は、永年にわたって有機化学と化学生物学の

研究と教育に邁進され、有機化学と生命科学の新たな融合を図り、分子生物学と構造生物学の手法を駆使して、未知なる生命現象の解明とその研究成果の応用において顕著な業績を挙げられた。同時に多くの優れた人材を輩出された。その業績は、生体触媒を用いた有用物質の高効率合成や、酵素反応に伴う分子の動きを可視化する時分割X線結晶解析法の研究等に及び、環境調和型化学反応の開発や化学生物学をはじめとする最先端分野の先駆けとして、それらの創生に尽くし今日の隆盛に大きく貢献された。

さらに、日本農芸化学会、日本化学会、有機合成化学協会および近畿化学協会など諸学協会の運営と発展に多大な貢献をされた。特に生体触媒研究における実績が農芸化学発展の優れた功績と認められ、平成8年4月に日本農芸化学会功績賞を受けられた。

(化学研究所)

日高 敏隆 名誉教授



日高敏隆先生は、平成21年11月14日逝去された。享年79。

先生は、昭和27年3月に東京大学理学部を卒業、同32年同大学理学研究科博士課程を修了、同34年より東京農工大学講師に就任、助教授、教授

を経て、同50年8月京都大学教授に就任し、理学部動物学教室において動物行動学を担当された。平成元年から同3年まで理学部長・理学研究科長の任につかれた。平成5年3月に停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。また、平成7年から同13年まで滋賀県立大学学長、同13年から同19年まで総合地球環境学研究所所長、同13年から京都市青

少年科学センター所長を務められた。平成12年に南方熊楠賞、京都新聞大賞文化学術賞を受賞、同20年には瑞宝重光章を受章された。

先生は、さまざまな動物の行動のしくみを探る研究を日本に導入し、昭和57年には日本動物行動学会を設立し、長く会長を務められた。チョウやガの配偶行動に関する研究は、世界的に高く評価されている。先生は、自らの研究のみならず、一般への知識普及や研究者育成に力を注がれ、『ソロモンの指環』『利己的な遺伝子』『鼻行類』などの訳書、『チョウはなぜ飛ぶか』『春の数えかた』などの著書は広く読まれている。

(大学院理学研究科)

四手井 綱英 名誉教授



四手井綱英先生は、平成21年11月26日逝去された。享年97。

先生は、昭和12年京都帝国大学農学部林学科を卒業、秋田営林局、山林局本省、林業試験場を経て、同29年京都大

学農学部教授に就任、第三(造林学)講座を担当された。その後、造林学を生態学的な視点から発展させるべく、講座名を森林生態学に変更された。昭和50年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、昭和51年から同56年まで日本モンキーセンター所長、同55年から同61年まで京都府立大学学長を務められた。

先生は、国内外の森林を踏査し、学術調査を推進してこられ、IBP(International Biological Program)では、国内の多くの大学と共同でわが国の森

林の生産力に関する基礎的データを集積し、さらに北米西海岸の巨木林の調査も実施された。一方、身近な里山の重要性を説くとともに、熱帯雨林、そして知床、白神山地、屋久島をはじめとする各地の自然や、オオタカなどの希少な野鳥の保護に向けて積極的に発言を続けてこられた。先生の研究活動は、雪氷、森林、霊長類ときわめて幅が広いものであった。

先生の主な著書に『アカマツ林の造成』『森林の価値』『日本の森林』『森の生態学』『森林保護学』『熱帯雨林を考える』『言い残したい森の話』等がある。

また、この間、日本学術会議会員、日本雪氷学会会長をはじめ、日本生態学会、日本林学会などにおいても要職を務められ、昭和30年日本雪氷学会賞、同51年日本農学賞および読売農学賞、同61年勲二等瑞宝章、平成元年ヒューマン大賞、同3年京都府文化賞特別功労賞、同10年南方熊楠賞を受けられた。

(大学院農学研究科)

長く「隔地施設紹介」としてシリーズ記事を巻末に掲載し、ご愛読いただいていたが、平成21年12月号をもってひととおり施設を紹介し、終了いたしました。新シリーズとして、平成22年2月号から「グローバル COE プログラム紹介」を掲載いたします。

総務部広報課